

日野中学校竣工式



▲生徒代表の言葉を凛々しく述べる島田さん



厳肅な雰囲気の中で竣工式が行われました

晴天に恵まれた3月14日(日)、日野中学校竣工式が開催されました。当日、玄関先では日野中吹奏楽部の生徒たちが、出席者を演奏で出迎えました。

町長式辞、工事報告などが行われ、生徒会長の島田侑一郎さんが生徒代表として、「町民の皆さんの夢や希望の詰まったこの校舎をいつまでもきれいに使っていきたい」と思います」と、感謝の気持ちを述べられました。

出席者の受付や乾杯用の昆布茶の準備など、生徒会のメンバーも協力。また、最後に出席者をお見送りする際には、音楽部がコーラスを披露しました。

この日までに改修した体育館の外観は、校舎との調和を図り、落ち着いた雰囲気。屋外水泳プールは、明るい色調でイメージを一新し、県内唯一の50mプールとして生まれ変わりました。

想いの詰まった校舎とともに、新しい時代に向けて子どもたちは大きく飛躍してくれることでしょう。

感雑向綿

日野町長 藤澤直広

桜の花が咲き誇り、ピカピカの一年生が今年も元気に入学です。新しい年度の始まりは心が弾むとともに気が引き締まります。今年の小学一年生は198人の予定です。ちなみに平成21年度の母子手帳の発行数は230人を超えました。少子化が叫ばれています。2000人程度の出生を維持していることはありがたいことです。

ところで、新年度予算に内池にある旧母子健康センターの解体経費を計上しました。母子健康センターは昭和36年に建設され、当時の広報「ひの」には、「県下で2番目にできた妊娠から分娩、育児と一貫した母子の健康を指導するための施設」と紹介されています。それまでは自宅での出産が中心で「産婆さん」(助産師)が赤ちゃんをとりあげられていました。昭和50年過ぎまで母子健康センターで出産されていますが、その後は病院や産科医院が主流になり、昭和61年に現在の保健

センターができたことに伴い役目を終えました。昭和36年当時1年間に300人ほどの赤ちゃんが生まれていましたが、出産場所に困ったことはありませんでした。

ところが、近年、産科が減少し、社会問題になっています。日野記念病院も4月から産科が「休診」されることになりました。滋賀医大から派遣されていた医師が大学の事情で派遣できなくなったことが理由です。大変大きな問題であり、さっそく県の健康福祉部に要請にいききました。「県でも大事件な問題と認識し医師の確保や養成に努力している」「滋賀医大の産婦人科の教授に対応を要請している」と県での対応状況を説明されました。ここ数年、医療分野の「構造改革」によって、全国的に医師不足による深刻な医療崩壊が続いており医療体制の再建は急務です。滋賀県では、県内7つの保健医療圏ごとに医療体制の整備を図ることとされていますが、引き続き県や病院、医師会などに要請するなどし、安心して出産ができ健やかに子育てができるよう努力したいと思っています。